

天草・島原の乱

- 徳川幕府を震撼させた120日 -

鑑賞のてびき

天草・島原の乱

寛永14年(1637)から寛永15年(1638)にかけて天草・島原の乱がおこりました。この乱は、島原城主松倉氏と天草領主寺沢氏とが領民に過酷な年貢を課し、キリスト教徒を弾圧したことに抵抗した農民の一揆です。島原半島と天草島は、かつてキリスト大名の有馬晴信と小西行長の領地で、一揆勢のなかにも有馬・小西氏の軍人やキリスト教徒がたくさんいました。天草四郎時貞を大将にした約3万人の一揆勢は、島原城下や富岡城を攻めた後、島原半島南部の原城にたてこもりました。

これに対し、幕府(三代將軍家光)は、上使(使者)を派遣するとともに、九州の諸大名ら約12万人を動員し、一揆の平定にあたりました。上使松平信綱の指揮のもと、原城を包囲した幕府軍は、寛永15年(1638)2月27日総攻撃を行い、翌28日にこれを落城させています。

1 キリスト教の禁止

徳川幕府は、はじめキリスト教を黙認していました。しかし、幕府のめざす国家体制とキリスト教が相容れないものとして、キリスト教を禁止するようになりました。慶長17年(1612)幕府直轄領に禁教令を発令、翌年には將軍秀忠の名で「伴天連追放之文」をだし、全国的にキリスト教を禁止しました。これにより、幕府や諸藩は宣教師やキリスト教信者に對し国外追放や処刑など激しい迫害を加えるようになりました。

寛永年間(三代將軍家光の時代)になると、禁教政策とともに貿易の統制が強化されます。寛永10年(1633)2月、幕府は奉書船以外の日本船の海外渡航を禁じ、寛永12年(1635)には、奉書船を含めた日本船の渡航を全面的に禁止しました。幕府は、日本人が海外へ渡る道を完全に閉ざしてしまったわけですが、その第一の理由は、禁教政策を徹底させるためで、当時の幕府がいかにキリスト教を恐れていたかがわかります。

寛永12年(1635)8月、家光は全国の大名に対して、領内でのキリスト改めの実施を命じ、日本全域でのキリスト根絶に乗り出しました。幕府や諸藩は訴人褒賞制、踏絵、南蛮誓詞などさまざまな方法を用いてキリストの摘発を行っています。

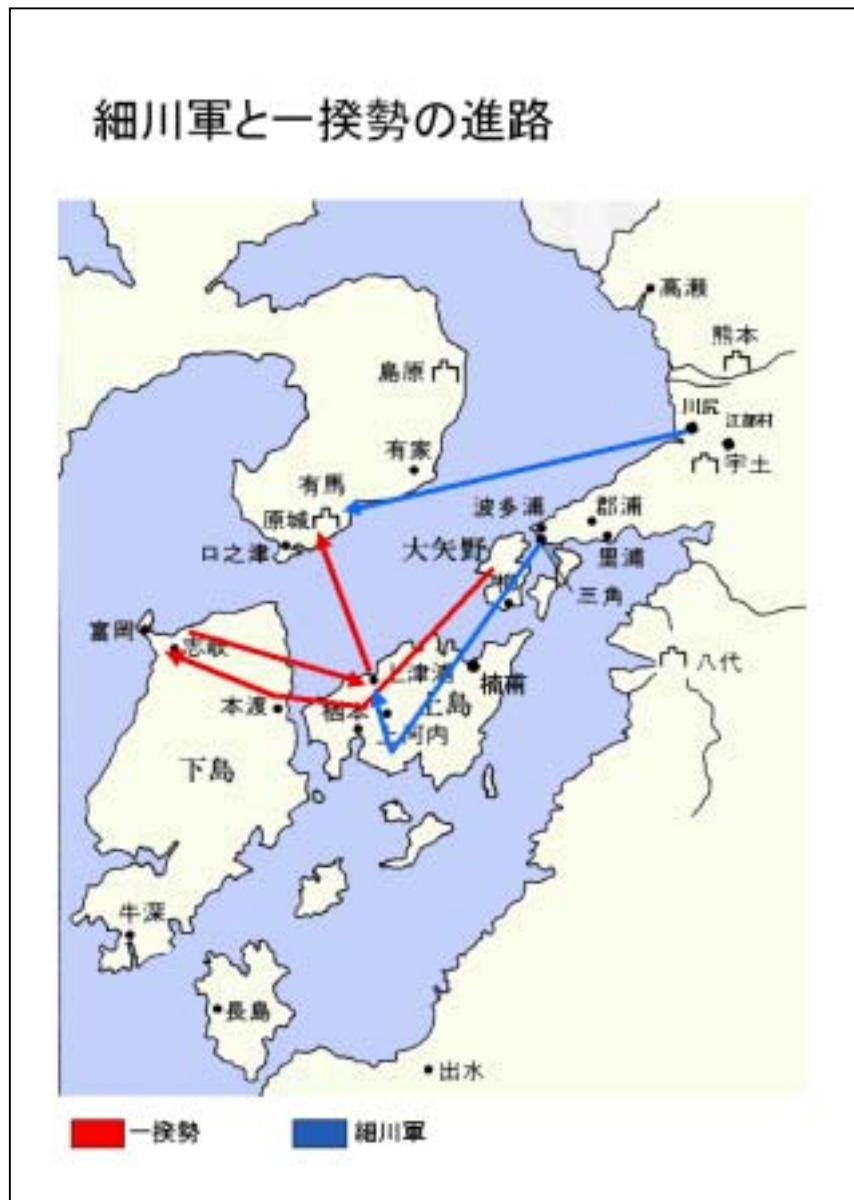
細川藩では、藩主忠興の妻ガラシャがキリストだったこともあり、キリスト教に対し寛容な態度を取っていました。しかしながら、慶長18年(1613)に禁教令が出されると、幕府の方針に従い、領内すべての信徒に棄教をせされました。寛永9年(1632)、豊前小倉から肥後熊本へ国替になった細川藩は、積極的にキリスト改めを行います。藩領の宇土以南はキリスト大名小西行長の旧領で、多くの隠れキリストがいると考えられたからです。藩主細川忠利は、踏絵など長崎にならった摘発方法を導入し、厳格なキリスト改めを行いました。

2 肥後細川藩と天草・島原の乱

寛永14年(1637)10月、天草・島原の乱が起こった時、肥後細川藩がもっとも恐れたのは、一揆が細川領内に飛び火することでした。特に八代や宇土は、キリスト教大名小西氏の旧領で天草に隣接していたため、厳重な警戒をしきました。また、領内に潜む一揆関係者の摘発にも力を注ぎました。

一揆が拡大し、島原城下や富岡城が攻撃を受けると、島原・唐津両藩から援兵要請が届きます。ところが、武家諸法度により幕府の指示なく領外へ兵を出すことが禁じられていたので、すぐに出動することはできませんでした。細川藩に天草への出動命令が下ったのは、11月末のこと、乱発生から一ヶ月が経過していました。12月上旬、細川光尚(藩主忠利嫡男)は、軍勢を率いて天草上島の上津浦に進軍しますが、一揆勢はすでに島原へ渡った後でした。

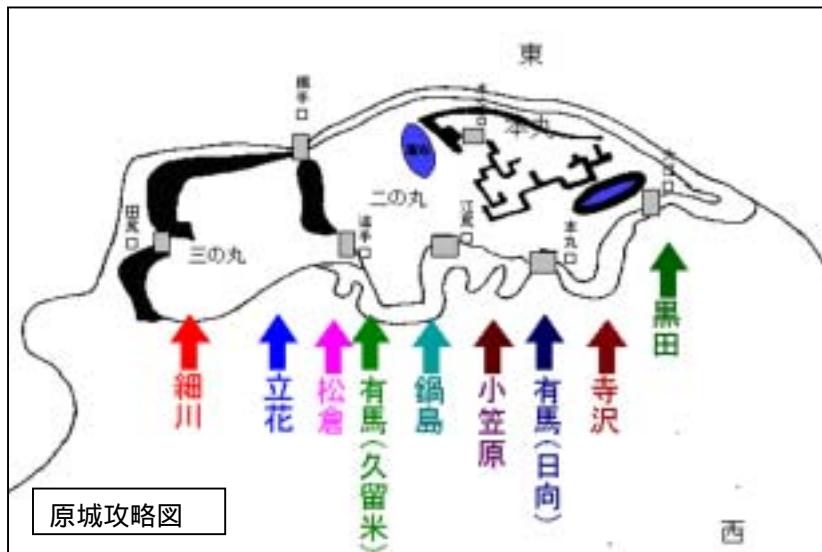
寛永15年(1638)
1月、島原に出陣した細川軍は、原城包囲戦に参加しました。江戸にいた藩主細川忠利は、急ぎ島原に下り、細川軍を指揮しています。2月27日の総攻撃では、三の丸方面から城に乗り入れ二の丸へと進み、本丸一番乗りを果たしました。また、家臣陣佐左衛門が天草四郎の首を取る働きをしています。



3 原城の戦い

天草・島原で蜂起した一揆勢は、寛永14年(1637)11月の終わりから原城に集結し、幕府軍を迎え撃ちました。原城は、島原半島南部(長崎県南高来郡)に位置する旧領主有馬氏の城です。松倉氏が領主となった後は、廃城となっていました。幕府は、板倉重昌を上使として派遣し、島原・佐賀・久留米・柳川藩の兵を以て原城を攻めさせますが、一揆勢の強い抵抗に会い、なかなか落とすことができませんでした。翌15年元旦の総攻撃では、総大將重昌が戦死するなど、幕府軍は4千人余り(有馬1,194人・鍋島2,883人・松倉344人・諸大名使者30人)の死傷者を出し、敗北しています。

度重なる敗戦のなか、幕府は新たに上使として松平信綱を派遣し、九州諸大名に出軍を命じました。これにより、細川(肥後熊本藩)・黒田(筑前福岡藩)・鍋島(肥前佐賀藩)・立花(筑後柳川藩)・有馬(筑後久留米藩)・有馬(日向延岡藩)の軍勢約12万人が動員されました。上使松平信綱は、兵糧攻め作戦を取り、周到に城攻めの準備を整えます。一ヶ月以上ものあいだ原城を包囲し続けた幕府軍は、寛永15年2月28日を総攻撃の日と定めます。ところが、二の丸方面を担当した鍋島軍が抜け駆けしたため、予定より一日早い27日に戦闘が始まりました。城乗りは、三の丸・二の丸・天草丸の三方面に分けられ、細川・立花軍が三の丸、鍋島軍が二の丸、黒田軍が天草丸へと乗り込みました。戦闘は翌日まで続き、多くの犠牲者を出して、落城しました。一揆勢はその多くが命を失ったといわれており、原城跡からは、現在もなお多くの遺骨が出土しています。



原城跡の石垣



4 天草・島原の乱後

天草・島原の乱後、幕府はますますキリスト教を恐れるようになり、寛永16(1639)年にポルトガル人を日本国内から追放します。ポルトガルは、貿易によって日本に絹織物などの商品をもたらしていましたが、キリスト教を布教する国家として、幕府はポルトガルを敵視するようになりました。当時の東アジアは、イスパニア(スペイン)・ポルトガルの勢力が強く、ポルトガルとの国交断絶は、日本の海外進出への道を閉ざすものでした。それでも幕府は、キリスト教の禁止を徹底するために、鎖国を選択したのでした。

ポルトガル船の来航を禁じた幕府は、異国船に対する防衛のため、長崎周辺の九州大名全員に長崎および九州西海岸防備を義務づけました。また、寛永17年(1640)マカオからポルトガル船が貿易の再開を求めて長崎に来航すると、異国船を見張るための遠見番所がつくれるようになりました。肥後熊本にも、海岸線に沿って遠見番所が設置されています。

このように、沿岸防備体制が構築されていた頃、八代城主細川三斎が正保2年(1645)に死去します。その後任に選ばれたのは、細川家の家老松井興長でした。任命の理由は、八代が長崎や異国に通じる大切な場所で、信頼のおける家臣松井興長が適任であったからだといいます。そもそも八代城は、薩摩の押さえとして存続が許された城でしたが、ここに到り異国に対する防衛基地という新たな役割が加えられたのでした。

まついおきなが
松井興長

